

## ボーイスカウトにおけるキャンプの教育効果について

### —スカウトがキャンプで得た成果, および, 興味・関心の変化について—

Educational effects of Scout camp

—Achievements obtained by scouts and changes in interests through participation in summer camp—

田中 優<sup>1</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学人間関係学部

Masashi Tanaka<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Faculty of Human Relations, Otsuma Women's University

2-7-1 Karakida, Tama-City, Tokyo, Japan 206-8540

キーワード: ボーイスカウト, 教育効果, スカウト教育法, スカウトキャンプ

Key words: Boy Scout, Educational Effect, Scout Method, Scout Camp

#### 抄録

本研究は、ボーイスカウトにおけるキャンプ（スカウトキャンプ）の教育効果について、その質的な側面に着目し、おもに、スカウトがキャンプで得た成果、および、キャンプの前後におけるスカウト技能に関する興味・関心の変化を明らかにすることを目的としている。そのために、ボーイスカウトの年間活動のメインイベントである夏季キャンプについて、11都県のボーイスカウト124名（男子：101名、女子：23名）を調査対象として、①スカウトがキャンプで得た成果、②自信・興味をいだいたスカウト技能等に関して、キャンプの参加前と参加後に質問紙調査を実施し、数量化Ⅲ類による分析を行い、質的な変化を明らかにした。その結果、スカウトは、キャンプに参加することで、①「体力と精神力」「スカウト精神」「優しさ」「友情」「技能・経験・自信」の5つの成果を得ていた。②徳育的な資質・能力である「スカウト精神」の成果を得ていた。③スカウトスキルに対する興味と関心が明確化した。④スカウトソングの捉え方が変化し、スカウトソング本来の教育効果の発揮が示唆された。

#### 1. 問題および目的

##### 1.1. ボーイスカウトにおけるスカウト教育法とスカウトキャンプについて

体験活動の重要性が指摘され、その実践のために、多様な教育の場での体験活動が望まれている。学校教育であるフォーマル教育、家庭教育であるインフォーマル教育、そして、地域における組織化された教育であるノンフォーマル教育の3つの教育の内、ボーイスカウトは、ノンフォーマル教育に分類される。体験活動の実践における長い歴史と大きな実績、および、今後への可能性を有するボーイスカウト教育ではあるが、わが国におけるボーイスカウトの教育効果に関する実証的研究は非常に少ない。わずかに、ボーイスカウトの長期野営における体験活動の教育効果に関するもの

(中野ら[1][2])や短期のキャンプ訓練における体験活動の教育効果に関するもの(田中[3][4])などがあるのみである。すなわち、90余年の歴史を持つ日本のボーイスカウト教育に関する教育効果についての実証的研究は、未だほとんど手が着けられていないといえる。

ボーイスカウトは、1907年、イギリスでベーデン・パウエルが始め、その後世界中に広まった青少年教育運動である。その教育目的は、公益財団法人ボーイスカウト日本連盟[5]によれば、“本連盟は、ボーイスカウトの組織を通じ、青少年がその自発活動により、自らの健康を築き、社会に奉仕できる能力と人生に役立つ技能を体得し、かつ、誠実、勇気、自信および国際愛と人道主義を把握し、実践できるよう教育することをもって教育の

目的とする。”としている。そして、この目的を達成するための教育方法は、「スカウト教育法(スカウティング)」と呼ばれており、「スカウトのちかいとおきて(Scout Promise and Law)」を中心とした、「行うことによって学ぶ(Learning by Doing)」「個人の進歩(Personal Progression)」「チームシステム(Team System)」「成人の支援(Adult Support)」「象徴的枠組み(Symbolic Framework)」「自然(Nature)」「社会との協同(Community Involvement)」の8つの要素が全体を構成し、1つのシステムとして構成されている。これら要素の一つひとつは、教育的な機能を持っており、各要素は他の影響を受けて完全なものになるとされている。

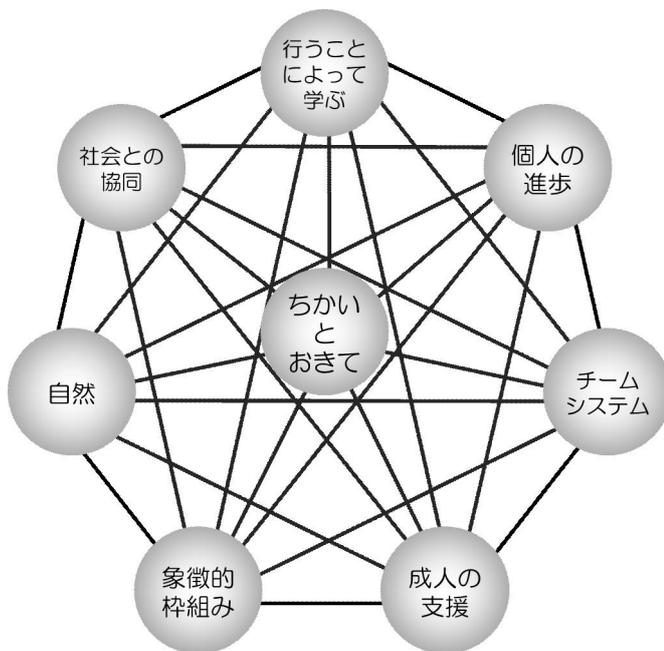


図1 スカウト教育法の8つの要素とそれらの関連

また、野外はスカウティングの教場であるといわれており、スカウト教育法は、野外での活動を基本としている。スカウトは、自然の持つ力を観察し、その中で生活することで、自分たちの限界に挑み、そこから、自らを発達、成長させる。また、自然への畏敬の念、自然と調和を図ること、自然の相互依存を理解することは環境のための行動へとつながるとされている。

これらの考え方を基として行われるキャンプは、スカウトキャンプと呼ばれ、ボーイスカウトの中心的な活動とされている。

## 1.2. 組織キャンプが及ぼす教育効果

ボーイスカウトにおけるスカウトキャンプに限らず、学校、地域など一般に、教育的効果をねらいとして、組織的、計画的、意図的に展開されるキャンプが行われており、これらは、組織キャンプや教育キャンプと呼ばれている。

組織キャンプが参加者に及ぼす教育効果については、自己効力、自尊心、感性、リーダーシップ、「生きる力」など、様々な研究により明らかにされている。

自己効力については、飯田ほか[6]は、小学5、6年生を対象とした6泊7日のキャンプにおいて、キャンプ経験が参加児童の一般性自己効力に及ぼす効果について研究を行い、キャンプ経験は、児童の一般性自己効力の向上に効果があり、特に、「失敗に対する不安」因子に著しい効果が認められるとしている。

自尊感情と信頼感については、正親ほか[7]は、中学1年生を対象とした組織キャンプにおいて、組織キャンプ体験が生徒の自尊感情と信頼感に及ぼす効果について検討し、組織キャンプ体験が生徒の自尊感情および信頼感に肯定的影響をもたらすことを明らかにした。

感性については、針ヶ谷ほか[8]は、感性を、広義には「価値あるものに気付く感覚」と定義づけられるとし、「感性は、人間関係や価値観の形成、自己実現の過程においても不可欠なものである」と考え、小学5年生から中学1年生を対象とした10泊11日のキャンプにおいて、長期キャンプ経験がキャンプ参加者の感性に与える効果について検討し、長期キャンプには感性の向上を促す効果があるとしている。

また、リーダーシップについては、倉本[9]は、小学5、6年生を対象とした4泊5日のキャンプにおいて、参加者のリーダーシップ行動の変容、および、学校生活におけるリーダーシップ行動に及ぼすキャンプ経験の効果について研究を行い、キャンプ経験によって学校生活におけるリーダーシップ行動の向上が認められ、特に、対人行動の向上および諸活動に対する建設的、積極的参加の向上が顕著であることを明らかにしている。

社会的スキルについては、西田ほか[10]は、小学5、6年生を対象とした7泊8日のキャンプにおいて、組織キャンプを児童の社会的スキルを改善するためのアプローチとして捉え、組織キャンプ

体験にともなう社会的スキル向上の効果について検討し、「向社会的スキル」はポジティブな方向に改善されることが示されたと述べている。

「生きる力」については、橘ほか[11]は、5泊から31泊の自然体験活動67キャンプ(事業)を対象に、キャンプ前後の変化量から参加者の「生きる力」への影響を検証し、①長期キャンプへの参加は、参加者の「生きる力」の向上に効果的であった。②長期キャンプの「生きる力」への効果は、「徳育的能力」よりも「心理的社会的能力」の側面により大きく働いた。③生活環境・自然環境が日常より厳しい条件下のキャンプの方が、「生きる力」の向上により効果的であった。④克服的要素を含んだ活動(プログラム)がより効果的であったとしている。

### 1.3. スカウトキャンプの教育効果

筆者は、組織キャンプが参加者に及ぼす様々な教育効果に関する研究を参考に、スカウト教育法の教育効果について、その測定可能性を確認することを主眼とした研究を行っている。まず、短期の訓練キャンプにおける教育効果について、キャンプへの参加により、スカウトの「生きる力」の心理社会的能力が向上し、スカウトが自己を肯定的に捉えるようになることを明らかにした(田中[3][4])。続いて、隊の年間活動のメインイベントである夏季キャンプにおける教育効果について、夏キャンプへの参加により、スカウトの①「生きる力」「生きる力」を構成する「心理的社会的能力」「心理的社会的能力」を構成する「積極性」「視野・判断」が、また、②リーダーシップ、リーダーシップを構成する課題遂行機能と集団維持機能が、そして、③自尊心のそれぞれの尺度得点が向上することを明らかにしている(田中[12])。これら一連の研究結果は、スカウトキャンプの教育効果のうち、各心理尺度の量的な変化における教育効果を示すものである。

### 1.4. 本研究の目的

そこで本報告では、スカウトキャンプの教育効果について、スカウトがキャンプで得た成果、および、キャンプの前後におけるスカウト技能に関する興味・関心の質的な変化を明らかにすることを目的としている。

## 2. 方法

### 2.1. 調査対象者

調査対象者は、11都県のボーイスカウト124名(男子:101名,女子:23名)。平均年齢(SD)は、事前調査,事後調査ともに、男子12.6歳(1.27),女子12.3歳(1.06)であった。

表1:調査協カスカウト数(地区・県別)

地方区	県	スカウト数
関東	東京	44
関東	神奈川	7
関東	千葉	7
関東	埼玉	7
中部	新潟	13
中部	福井	7
中部	愛知	9
中国・九州	山口	10
中国・九州	福岡	8
中国・九州	長崎	6
中国・九州	熊本	6

124

### 2.2. 調査方法

調査は、泊数4泊5日前後で行われるキャンプ(夏キャンプ)の参加前(事前調査:2016年6~7月)と参加後(事後調査:2016年8~9月)に、質問紙調査により実施した。

### 2.3. 調査内容

調査内容は、以下のとおりである。

#### (1)ボーイスカウト活動について

- ①スカウト活動の楽しさ、②夏キャンプへの期待(事前)・夏キャンプの感想(事後)、③興味・自信のあるスカウト技能、④進級への意欲
- (2)「生きる力」:「IKR 評定用紙(簡易版)」(独立行政法人国立青少年教育振興機構[13])28項目(心理的社会的能力:14項目,徳育的能力:8項目,身体的能力:6項目)
- (3)リーダーシップ測定尺度(国立妙高青少年自然の家[14])20項目(課題達成機能:12項目,集団維持機能:8項目)
- (4)自尊感情尺度(福岡県青少年アンビシャス運動推進室[15])10項目

### 2.4. 倫理審査

本研究は、大妻女子大学生命科学研究倫理委員会の審査による倫理審査の承認(平成28年度28-014)を得ている。

### 3. 結果

#### 3.1. スカウトがキャンプで得た成果

キャンプに参加して得た成果は何かを明らかにするために、「夏キャンプ（キャンポリー）で、あなたが得たものや身に付いたものは何ですか？」という設問への回答について、数量化Ⅲ類による分析を行った。分析に使用したカテゴリーは、「キャンプの技能」「貴重な経験」「友情」「自信」「リーダーシップ」「体力」「仲間」「忍耐力」「がんばる力」「勇気」「優しさ」「思いやり」「やる気」「礼儀正しさ」「感謝の気持ち」「誠実さ」の16カテゴリーである。

これら16カテゴリーについて分析を行ったと

ころ、第Ⅰ軸の固有値は.269、第Ⅱ軸の固有値は.267であった。さらに、プロットされたデータのグルーピングを行うために、得られた第Ⅰ軸と第Ⅱ軸のカテゴリースコアについてクラスター分析（ユークリッド距離・ウォード法）を行った。クラスター分析の結果に基づいて同じクラスターのデータをプロット図上でグルーピングしたところ、第一象限は、「体力、感謝の気持ち・やる気・がんばる力・忍耐力」、第二象限は「思いやり・礼儀正しさ・勇気・誠実さ」、第三象限は、「優しさ」と「仲間・友情」、そして、第四象限は「キャンプ技能・貴重な経験・リーダーシップ・自信」の5つの成果にグルーピングされた（図2）。

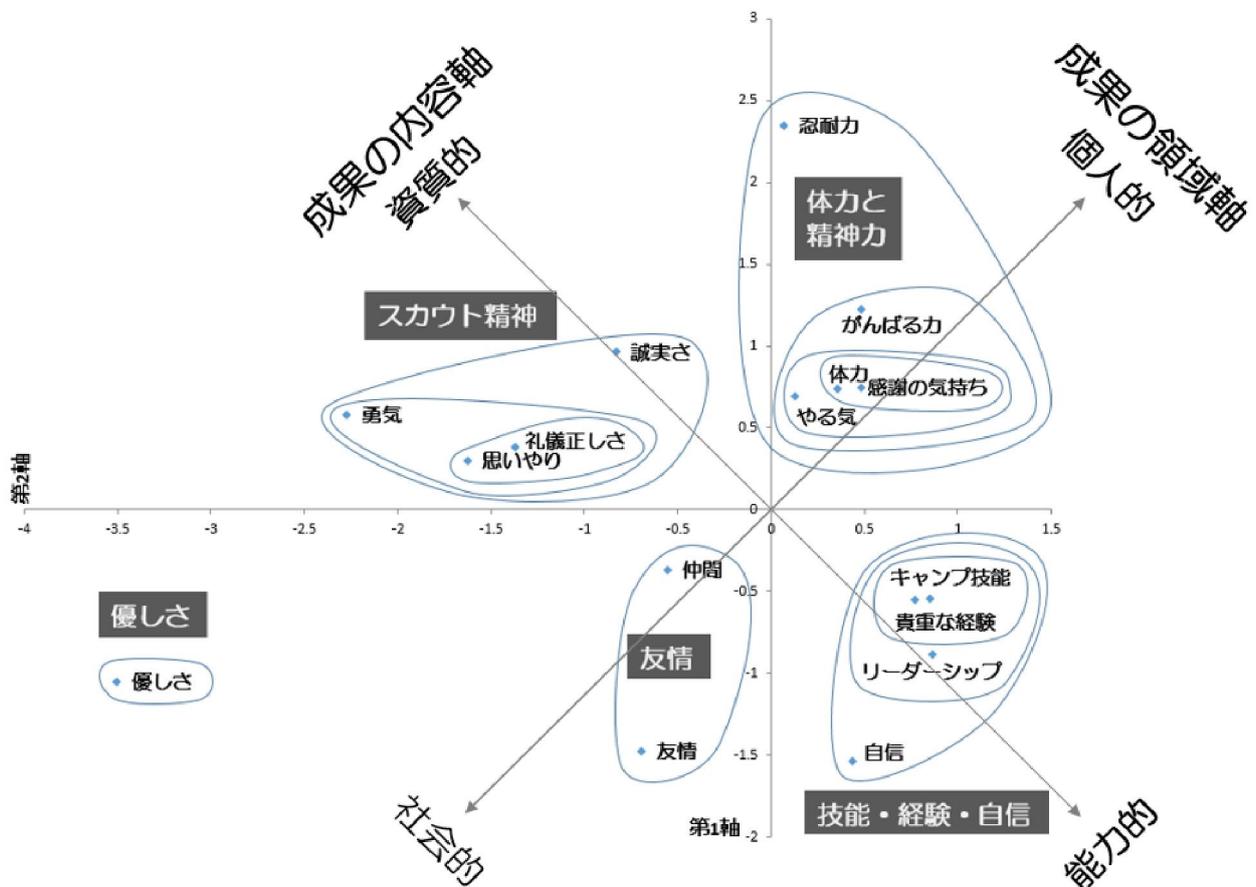


図2 スカウトキャンプで得られた5つの成果

### 3.2. 自信・興味をいだいたスカウト技能の変化

キャンプに参加したことで、自信や興味をいだいたスカウト技能が、どのように変化するかを明らかにするため、夏キャンプの前後でたずねた「自信がある、または、好きなスカウト技能は?」という設問への回答について、キャンプ参加の前後でそれぞれ、数量化Ⅲ類による分析を行った。分析に使用したカテゴリーは、キャンプ参加の前後とも、「読図」「計測」「通信」「火起こし」「ロープ(結索)」「救急法」「野外料理」「野営法(テント)」「ソング」の9カテゴリーである。

キャンプ参加前の第Ⅰ軸の固有値は.539, 第Ⅱ軸の固有値は.485であった。キャンプ参加後の第Ⅰ軸の固有値は.502, 第Ⅱ軸の固有値は.480であった。さらに、キャンプ参加前と参加後のそれぞれについて、プロットされたデータのグルーピングを行うために、得られた第Ⅰ軸と第Ⅱ軸のカテゴリスコアについてクラスター分析(ユークリッド距離・ウォード法)を行い、その結果に基づいて同じクラスターのデータをプロット図上で、そ

れぞれグルーピングした。

キャンプ参加前と参加後のプロット図の変化から、スカウトが自信や興味をいだいたスカウト技能の変化をみてみると、キャンプ参加前(図3)では、野営や野外活動に関連する技能である野営法、ロープ、野営料理、火起こし、通信、救急法が「野外活動技能」として一つのグループを形成し、ハイキングなどで必要な読図と計測が「読図と計測」のグループ、および「スカウトソング」の3つのグループが形成されていた。そして、キャンプ参加後(図4)は、「読図と計測」は参加前からの変化はみられなかった。しかし、参加前の「野外活動技能」から、野営技能である野営法、火起こし、ロープが分離する形で「野営技能」のグループを形成し、さらに、野外料理、救急法、通信の「野外活動技能」とソングが一つにグルーピングされ、キャンプの参加の前後で、スカウトが自信や興味をいだいたスカウト技能に変化があることが明らかとなった。

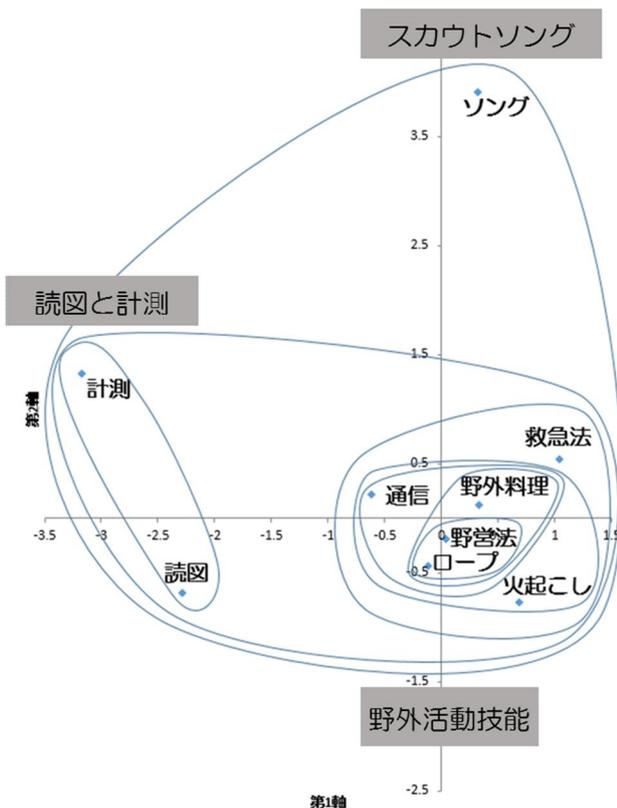


図3 夏キャンプ参加前：  
自信・興味があるスカウト技能

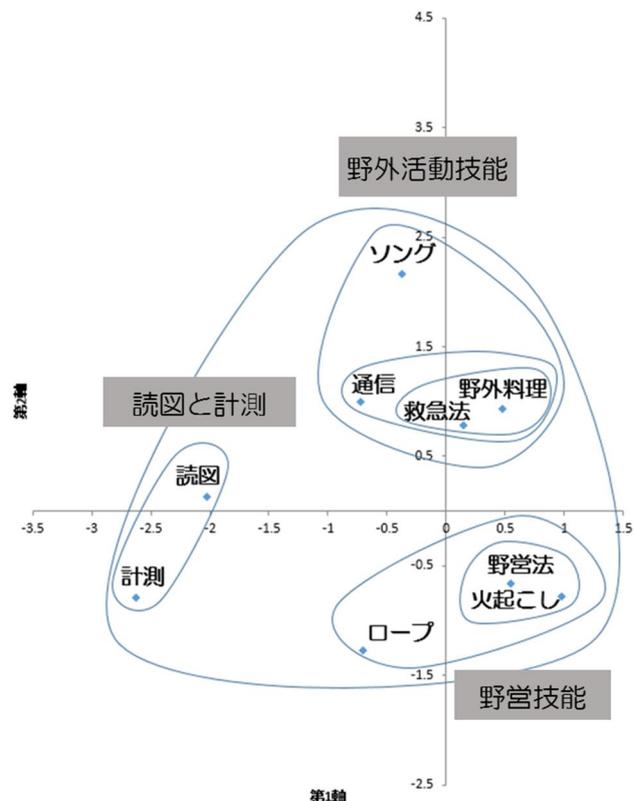


図4 夏キャンプ参加後：  
自信・興味があるスカウト技能

## 4. 考察

### 4.1. スカウトキャンプで得られた成果

スカウトがキャンプに参加して得た成果に関する数量化Ⅲ類の分析の結果について考察する。

#### 4.1.1. スカウトが、スカウトキャンプで得た5つの成果

数量化Ⅲ類によりグルーピングされた5つの成果について、それぞれに含まれるカテゴリーから、各成果について解釈してみると、スカウトは、キャンプに参加することから5つの成果を得たと解釈できる。まず1つめの成果は、体力や感謝の気持ち、忍耐力から成り、これらは、心身の成長に関する成果であると考えられることから、この成果は「体力と精神力」と解釈できる。2つめは、思いやり、礼儀正しさ、勇気、誠実さから成り、これらはすべて、ボーイスカウトの「ちかいとおきて」に含まれる資質である。「ちかい」（自発的な自らへのやくそく）は、スカウティングの原理（神へのつとめ、他へのつとめ、自分へのつとめ）を示したもので、ボーイスカウト運動の基本的な精神である。また、「おきて」は、スカウトにとっての日常行動の規範であるとされていることから、この成果は「スカウト精神」と解釈できる。3つめは優しさのみから成るため「優しさ」の成果と解釈できる。4つめは、仲間と友情を育む「友情」の成果と解釈できる。そして、5つめは、自然の中で貴重な経験をし、キャンプ技能を身に付け、貴重な経験を通して自信を得た、すなわち、この成果は「技能・経験・自信」の成果であると解釈できる。

なお、図に描かれた「キャンプで得られた5つの成果」の布置から、これらを説明する2つの軸、すなわち、成果の領域が個人的領域か社会的領域かを分ける「成果の領域軸」と、成果の内容が資質的内容か能力的内容を分ける「成果の内容軸」を想定することができた。前者について、第一象限の「体力と精神力」は、個人的な成果であり、第三象限の「友情」は、社会的な成果であると考えられ、これらは「成果の領域軸」により説明される。また、第二象限の「スカウト精神」は、資質的な成果であり、第四象限の「技能・経験・自信」は、能力的な成果であると考えられ、これらは「成果の内容軸」により説明される。

#### 4.1.2. 徳育的能力や資質に対するスカウトキャンプの教育効果（スカウト教育の独自性）

キャンプで得られた5つの成果のうち、「体力と精神力」「優しさ」「友情」「技能・経験・自信」は、心理社会的な能力、あるいは、身体的能力と解釈できる。これらに比して、「スカウト精神」という成果は、徳育的な資質、あるいは、能力であると解釈できる。これまで組織キャンプをはじめとする様々な体験活動が参加者に及ぼす教育効果についての研究では、体験活動は、心理社会的な能力や身体的能力に対してポジティブな影響を与えることが報告されている。一方、徳育的な資質、あるいは、能力に対する組織キャンプの教育効果については、例えば、橘ほか[11]は、長期キャンプの「生きる力」への効果は、「徳育的能力」よりも「心理社会的な能力」の側面により大きく働いたとしており、体験活動が徳育的能力や資質を高めたという報告は少ない。しかし、ボーイスカウトの長期キャンプにおいて、スカウト達が徳育的な能力や資質である「スカウト精神」を得たことを示す本研究の結果は、学校、地域などの組織キャンプとは異なる、スカウトキャンプの独自性を示すものであるといえる。

2018年度から小学校で、2019年度からは中学校で、道徳が教科化されることになるなど、学校教育においては、徳育的能力や資質を高める教育に関する研究が望まれている。ボーイスカウトのキャンプが徳育的能力や資質を高めるという本研究の知見は、フォーマル教育としての学校教育、インフォーマル教育としての家庭教育、その他のノンフォーマル教育としての地域における各教育現場において、また、教育の内容や手法に対する応用や改善などに有用な示唆を与えることが可能であると考えられる。

### 4.2. スカウトキャンプへの参加による自信や興味があるスカウト技能の変化

スカウトキャンプへの参加による自信や興味があるスカウト技能の変化を明らかにするために行った数量化Ⅲ類の分析の結果について考察する。

#### 4.2.1. スカウトキャンプへの参加によるスカウトの興味・関心の明確化

スカウトキャンプ参加前（図3）は、自信や興味がある技能は、「スカウトソング」と「読図と計測」、および、「野外活動技能」の3つにグルーピ

ングされた。このうち、「野外活動技能」に含まれる野営法・ロープ・野外料理・通信・火起こし・救急法といった技能は、図の原点付近で、一つにまとまってグルーピングされていた。すなわち、これらの技能は、本来は、それぞれ異なる性質のスカウトスキルであるが、原点付近に布置されているということは、それぞれが明確に区別されておらず、ひとまとまりに野外活動技能として認識されていると解釈できる。

一方、スカウトキャンプ参加後は、原点付近にひとまとまりになっていた野外活動技能が、野営（キャンプ）に必要な「野営法、火起こし、ロープ」と野外活動に必要な「救急法、野外料理、通信」と、に分かれ、さらに、「野外活動技能」に「ソング」が結び付く形で1つにグルーピングされた。すなわち、スカウトキャンプに参加することにより、参加前は、野外活動技能として、区別されずひとまとまりに認識されていた技能が、キャンプ参加により、それぞれの技能への理解が深まり、それぞれを明確に区別して認識されるようになったと考えられる。すなわち、スカウトは、スカウトキャンプに参加することで、スカウトスキルに対する興味と関心を明確化すると解釈できる。

#### 4.2.2. スカウトキャンプへの参加により、「歌を覚える」から「歌で覚える」へ

「ソング」について注目してみると、キャンプ参加前は、他の技能とは異質なものとして捉えられていた「ソング」が（図3）、キャンプ参加後には、「ソング」と「野外活動技能」とがひとつにグルーピングされた（図4）。ボーイスカウトの活動において歌われる歌（ソング）は、スカウトソングと呼ばれ、集会やキャンプのセレモニーで歌われるもの、活動の開始時、活動中、終了時に歌われるもの、あるいは、スカウト精神やスカウト技能に関するものなど、様々な歌が、教育的な目的を持って、効果的に歌われている。特に、スカウト技能との関連においては、『「歌を覚える」のではなく、「歌で（技能を）覚える」』といわれている。すなわち、キャンプ参加により、スカウトのスカウトソングへの捉え方が変化したことにより、スカウトソングが持つ、「歌で（技能を）覚える」という、本来の教育効果が発揮されることが示唆された。

## 5. まとめ

本研究の結果から、スカウトキャンプの教育効果の質的な側面について、以下のように結論づけられる。

### スカウトキャンプで得られる5つの成果について

①スカウトは、キャンプに参加することで、「体力と精神力」「スカウト精神」「優しさ」「友情」「技能・経験・自信」の5つの成果を得ていた。

### スカウトキャンプの徳育的能力や資質に与える教育効果について

②スカウトは、キャンプに参加することで、徳育的な資質・能力である「スカウト精神」の向上が示唆された。これは、学校、地域などの組織キャンプとは異なる、スカウトキャンプの独自性を示すものである。

### スカウトキャンプへの参加によるスカウトの興味・関心の明確化について

③スカウトは、スカウトキャンプに参加することで、スカウトスキルに対する興味と関心が明確化する。

### スカウトソングの教育効果の発揮について

④スカウトキャンプへの参加により、スカウトのスカウトソングへの捉え方が変化し、「歌を覚える」から「歌で覚える」という、スカウトソング本来の教育効果の発揮が示唆された。

## 謝辞

本研究の目的を理解し、調査実施に多大なご協力を賜りました指導者の皆さんに、また、調査に協力してくれたスカウトに深く感謝申し上げます。彌榮。

## 付記

本研究は大妻女子大学戦略的個人研究費（S2829：H28年度、S2934：H29年度）の助成を受けた。

## 引用文献

- [1]中野充ほか. 第22回世界スカウトジャンボリー（22WSJ）調査報告書—国際的な集団野外生活が青少年に与える影響—. 国立青少年教育振興機構調査研究報告書, 2012.
- [2] 中野充ほか. 第16回日本ジャンボリー(第30回アジア太平洋地域スカウトジャンボリー)にお

ける事業成果把握に向けた参加者に及ぼす効果—国際的な集団野外生活が青少年に与える影響—。青少年教育研究センター紀要, 2014, 3, p.82-99.

[3]田中優. ボーイスカウトにおける体験活動が青少年に与える影響. 人間関係学研究: 社会学社会心理学人間福祉学: 大妻女子大学人間関係学部紀要, 2016, 17, p.1-14.

[4]田中優. ボーイスカウトにおける体験活動が青少年に与える影響2 —2014年および2015年度における継続調査による検討—. 人間関係学研究: 社会学社会心理学人間福祉学: 大妻女子大学人間関係学部紀要, 2017, 18, p.141-153.

[5]公益財団法人ボーイスカウト日本連盟. 日本連盟規程集平成29年度版. 公益財団法人ボーイスカウト日本連盟, 2017, p.32.

[6]飯田稔ほか. キャンプ経験が児童の一般性自己効力に及ぼす効果. 筑波大学体育科学系紀要. 1992, 15, p.93-102.

[7]正親秀章ほか. 組織キャンプ体験が生徒の自尊感情と信頼感に及ぼす影響. 宇都宮大学教育学部教育実践紀要, 2016, 2, p.235-238.

[8]針ヶ谷雅子ほか. 長期キャンプ経験が参加者の感性に及ぼす効果. 日本体育学会第46回大会号. 1995, p.512.

[9]倉本満枝. キャンプ集団における児童のリーダーシップ行動の変容. 実験社会心理学研究, 1981, 20(2), p.127-135.

[10]西田順一ほか. 組織キャンプ体験による児童の社会的スキル向上効果. 野外教育研究. 2002, 5(2), p.45-54.

[11]橘直隆ほか. 長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響. 野外教育研究, 2003, 6(2), p.1-12.

[12]田中優. ボーイスカウトの夏季キャンプ参加が生きる力, リーダーシップ, および, 自尊心に与える影響. 人間生活文化研究, 2018, 28, p.428-434.

[13] 独立行政法人国立青少年教育振興機構. 体験活動による「生きる力」の変容が見える! 「生きる力の測定・分析ツール」. 独立行政法人国立青少年教育振興機構, 2010.

[14] 国立妙高青少年自然の家. 少年期(高学年)のリーダーシップ想定尺度活用術. <http://myoko.niye.go.jp/result/H23/leadership.pdf>, (参照 2015-2-3).

[15] 福岡県青少年アンビシャス運動推進室. 子どもの自尊感情と生活のあり方との関係についての研究. 福岡県青少年アンビシャス運動特別レポート. 福岡県青少年アンビシャス運動推進室, 2010.

(受付日: 2019年3月13日, 受理日: 2019年4月9日)

## 田中 優 (たなか まさし)

現職: 大妻女子大学人間関係学部教授

関西大学大学院社会学研究科社会心理学専攻博士課程後期課程修了. 博士(社会学)(関西大学). 専門は社会心理学. 現在は, 対人関係, 特に, 親密な対人関係における互惠的相互依存関係に関する理論研究, および, 実践研究. また, ボーイスカウトの教育効果に関する研究を行っている.

主な著書: 対人心理学の視点 (共著, ブレーン出版)

心理測定尺度集 I (共著, サイエンス社)

図とイラストで読む人間関係 (共著, 福村出版)

援助とサポートの社会心理学 (共著, 北大路書房)

被服行動の社会心理学 (共著, 北大路書房)

あるとき, 避難所は (共著, ブレーン出版)